慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	The things they carriedにおけるネイティヴの表象
Sub Title	The representation of natives in The things they carried
Author	濟藤, 葵(Saitō, Aoi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2017
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.112, (2017. 6) ,p.216 (31)- 225 (22)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01120001-0216

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

*The Things They Carried*におけるネイティヴの表象

濟藤　葵

はじめに

ヴェトナム戦争従軍作家Tim O'Brien作品において、多くの批評家が人種表象に異議を唱える。Tobey. C. Herzogは、処女作*If I Die in a Combat Zone* (1973)のヴェトナム人が「限定された民族中心的な観点」(57)から「他者」(56)として描かれていると指摘する。また、全米図書賞受賞作品*Going After Cacciato* (1978)に登場するヴェトナム人少女サーキン・オゥン・ワンの描写に関して、Renny Christopherは「アジア人女性についてのアメリカ人のクリシェを体現」している(231)と分析し、Katherine Kinneyは「最高の使用人、芸者としてのアジア人女性という西洋のファンタジー」(58)を表していると主張する。

本稿で論じる1990年の作品*The Things They Carried*においても同様な人種表象批判があるが、その矛先はヴェトナム人像に対してではなく、インディアン像に対して、具体的にはカイオワという名前のインディアン兵士に対して向けられている。多くのヴェトナム戦争小説がアメリカ白人兵と黒人兵の人種的緊張関係を描く傾向にある中で、本作品が黒人を一切登場させずインディアンに言及する点は見逃せない[1]。Jen Dunnawayはインディアン兵士カイオワに焦点を当て、常にテキストの「外部」(121)に位置する「周縁的」立場のカイオワの「例外性」や「インディアン・アイデンティティの強調」が、「白人的視点の中心性を強化している」(117)と批判する。Michael Tavel Clarkeも、黒人兵士が登場せず「明白な人種的シニフィアンの抑圧が行われている」本作品内での、「カイオワの人種」の強調と「アメリカ帝国主義の恐怖」(142)を強めるカイオワの「周縁に

追いやられた」（146）悲惨な死に目を向ける[2]。

先行研究が指摘するように、たしかにカイオワは作品中唯一のインディアンであり有標化された存在、かつ周縁的存在とみなされるかもしれないが、インディアンの属性を有しているのは必ずしもカイオワだけではない。換言するならば、カイオワのみならず、その他の登場人物にもインディアン的要素を見出すことができる。したがって、カイオワのみがインディアン性を体現するものとして分析し、本作品のインディアン像として提示することは、いささか不十分であるように思われる。*The Things They Carried*におけるインディアン表象に関する従来の研究については再考の余地があるのではないか。そう考え、本稿では、カイオワ、ヴェトナム人キャラクター、白人女性メアリ・アンに着目することによって、アメリカ白人とインディアンの関係性について考察する。

1. カイオワのインディアン性

アルファ・カンパニーという名の歩兵部隊に所属するインディアン兵士カイオワは、確実にインディアンの属性を受け継ぐ。「祖母から継承した白人不信」を抱くカイオワは、身の安全を守るため「祖父から譲り受けた古い狩猟用手斧」（3）を携える。待ち伏せや夜間作戦の時には、常に「音を立てないよう、モカシン」（9）を持参する。カイオワのもつインディアン的特徴は、他の場面にも見出すことができる。カイオワは、雨乞いの踊りを歩兵部隊の兵士ラット・カイリーとデイヴ・ジェンセンに教える。雨乞いの踊りとは「裸足でホーホーと声を上げながら、跳びはねる」（36）踊りのことである。Gregory Cajeteによれば、西洋の科学が「科学的合理主義に焦点」（51）を当てる一方で、インディアンの科学は合理的な思考に基づくのではなく、「身体、心、魂、精神と自然との相互作用から得た知識と真実」（46）に基づく。カイオワが奇妙で非論理的な雨乞いの踊りを実践する場面は、自然との対話を重んじるインディアンの科学に彼がいかに慣れ親しんでいるかを示す。また、歩兵仲間のラットが「どこに雨が降っているんだ？」と尋ねると、カイオワは「大地の動きは遅いが、バッファローは忍耐強い」（36）と答える。カイオワによる、「大地」という語の使用に注目したい。Sean Kicummah Teutonが「土地（ジオ）アイデンティティ」（46）と指摘するように、インディアンは土地に価値を置き、定住を好む傾向にあるからである。し

たがって、土地との強い結びつきを重視するカイオワの姿勢から、彼にインディアンの性質が備わっていると言える。

インディアン性を受け継ぐカイオワだが、彼と白人兵士の間には連帯感がある。序章で述べたように、Clarkeはカイオワの壮絶な最期と合衆国帝国主義を関連づけるが、カイオワの死は必ずしもインディアンであるカイオワ対白人兵士という構図を提示するものではない。雨が降りしきる真夜中、泥沼と化した野原で野営を行っていたカイオワは砲弾を受け死んでしまう。不運なことに、カイオワが殺された場所は村人たちの便所となっている排泄物のたまった「糞溜め野原」(162)と呼ばれる一帯であり、カイオワの死体は汚物とともに沈んでしまう。後日、カイオワの遺体捜索に取りかかった白人歩兵らは泥と悪臭に悪戦苦闘するが、ある兵士の発言「我々はそこに彼を置き去りにすることはできない」(174)に他のメンバーも同意し、カイオワを置き去りにすることなく沼地から遺体を引き上げる。「我々は」と集団として捉える主語を据えた白人隊員の発言は、カイオワと白人兵士との強固な関係性――「カイオワは彼らの友達だった」(174)――を示唆する。

カイオワと白人兵士の連帯感を考えるにあたり、彼が常に新約聖書を持ち歩くほどの熱心なキリスト教徒であることに繰り返し言及されているのは見逃せない。「敬虔なバプティスト派の信徒」であるカイオワは、「挿絵入りの新約聖書」(3)を肌身離さず持っている。ある時は就寝時でさえも、「新約聖書を開き、枕がわりにそれを頭の下に置いた」(18)。歩兵部隊をまとめ上げるジミー・クロス中尉も、部下であるカイオワの厚い信仰心について、「イエス・キリストの下での救済の契約」という信念が、カイオワの「微笑み」、「世界に対する彼の姿勢」、オクラホマ・シティーの日曜学校で教えている父親が誕生日プレゼントとして送った「挿絵入り新約聖書をどこへ行くにも携えていたところ」(164)に表れていると説明する。さらに、「カイオワのように、我々兵士の中にはキリスト教徒がいた。カイオワは、死後の生命についての新約聖書の話を信じていた」(239)と回想される場面もある。このように小説全体を通して反復されるカイオワの信仰心の強さの描写は、彼がいかに敬虔なキリスト教徒であるかを強調する。この繰り返しの言及を考慮に入れるならば、カイオワというキャラクターは、従来の指摘のようにインディアン的属性が前景化された存在、主流として描かれる白人アメリカ人の力を強める周縁的存在というよりも、むしろ白人アメリ

カ人に飼いならされ、彼らに同化したインディアンと解釈することができるのではないだろうか。

2. ヴェトナム人登場人物のインディアン性

Full Metal Apache: Transactions between Cyberpunk Japan and Avant-Pop America (2006) で巽孝之は、インディアン捕囚体験記のもう一つのヴァージョンとしてのヴェトナム戦争小説や映画について（169）、つまりヴェトナム人（イエロースキン）とインディアン（レッドスキン）とのモンゴロイドのつながりを指摘しているが、ここでは本作品に登場するヴェトナム人キャラクターにインディアンの特徴が投影されていることを確認したい[3]。歩兵仲間のテッド・ラヴェンダーが射殺される瞬間を目撃したカイオワは、彼のあっけない死に衝撃を受け、その様子を「セメント袋のように」（17）倒れたと表現し、他の隊員にその光景を何度も説明する。カイオワのあまりのしつこさに腹を立てた白人兵士バウカーは、「もう聞いたよ。セメント袋。いい加減、もう黙れ」（17）と語気を強め、カイオワを黙らせようとする。それにも関わらず状況説明を繰り返すカイオワに対し、バウカーは再度注意し、最終的には「賢いインディアン、黙る」（18）と怒る。本当は「もっと話したかった」（18）カイオワだったが、泣く泣くバウカーの指示に従い、声を出さず静かにする。

インディアンの黙殺化という性質が、ヴェトナム人キャラクターにも見られる。兵士の先頭に立ち、地雷回避と安全性を提供してくれる年寄りのパパさんは一言も発しない。パゴダでカイオワとヘンリー・ドビンズの世話をする二人のヴェトナム人僧侶は、「クスクス笑った」り（119）「微笑んだ」りし、唯一発する言葉は「良い兵隊さん」（120）というアメリカ兵にとって都合の良いものである。家族を殺されたヴェトナム人少女も、沈黙したまま踊り続ける。彼女の「両耳に両手の手のひらを当てる」踊りは「何かを意味していたに違いなかった」（135）が、アザールには「わからなかった」し、彼は「何か奇妙な儀式なのだろう」（136）と思った。インディアン兵士カイオワの雨乞いの踊りと同様、ヴェトナム人少女の踊りは、白人兵士には理解しがたい特有の文化から成るものなのである。その他のヴェトナム人は、豚小屋付近で殺害された老人、ナパームで焼かれたヴェトコンの看護師や赤ちゃんといったように皆死んでいる。すなわち、作品

中のヴェトナム人に共通することは、発言権をもたないということである。

声をもたないということを考慮する際、ヴェトナム戦争時に米兵の間で広まった言葉“Only good gook is a dead one”は重要になってくる。作品内でも、アメリカ白人兵士が抱くヴェトナム人の声に対する恐怖心が描かれる。六名のパトロール隊は「奇妙なグークの音楽」(73)、つまりグークによる「音楽やおしゃべりみたいなもの」（74）を聞く。得体の知れないグークの声に脅える彼らは「砲撃が必要だ。この気味の悪いグークのロック・バンドを吹き飛ばしてくれ」（73）と訴えたい気持ちに駆られる。ヴェトナム戦争での“Only good gook is a dead one”という表現は、Philip Henry Sheridan将軍が1869年、コマンチ族との対話の中で発した“The only good Indians I ever saw were dead”がいつしか“The only good Indian is a dead one”に転じたものであり、その主体がヴェトナム戦争ではインディアンからグークへと変わり、活用されたのだ。Sheridan将軍の言葉が当時のインディアン一掃を試みた時代と共振する意味へと変えられたことをWolfgang Miederが分析するように（44）、インディアン掃討を円滑に進めるよう利用されたのがこの言葉なのである。そしてヴェトナム戦争時には、“Only good gook is a dead one”がヴェトナム人掃討を正当化するために使用された。Leslie A. Fiedlerは、終焉を目論まれたインディアンの存在を「消えゆくアメリカ人」（12）と呼ぶが、ヴェトナム人は第二の消えゆくアメリカ人に相当するだろう。インディアンであるカイオワの発言権が奪われる場面は、Sheridan将軍の言葉を想起させると同時に、本作品に登場する声を奪われたヴェトナム人にインディアン性の反映を読み取れることを示唆する。

*The Things They Carried*の中でヴェトナム人の発言権剝奪が最も顕著に表れているのは、殺されたヴェトナム人の舌で作られた首飾りの場面である。その首飾りの舌先は「まるで最期の金切り声の一語を発するかのように、その舌先は上へと曲がって」おり（111）、言葉を発音しようとした瞬間に声が奪われてしまう状況が容易に想像できる。ここでは舌が使われているが、白井洋子によれば、ヴェトナム戦争時、死んだヴェトナム人の身体の一部が首飾りにされることがあり、その例としてアメリカ兵が死んだ敵兵の「耳を集めて靴ヒモなどに通し、ネックレスのように首から下げていた」（94）ことが挙げられている。さらに時代を遡ると、アメリカ人の頭皮狩り隊によるインディアン虐殺を描いたCormac McCarthyの1985年の作品*Blood Meridian or the Evening Redness in the West*にも、

敵であるインディアン、アパッチ族の耳でできた首飾りへの言及 ──「首飾りを強く引っ張って、それを見た。耳は完全に黒く硬く乾いていて、全然耳の形をしていなかった。人間のだ。人間の耳だ」(320) ── がある。アパッチ族の黒くなった耳同様、*The Things They Carried* で描写される「黒くなった革のような」(110) ヴェトナム人の舌の首飾りは、同時代のヴェトナム戦争でのヴェトナム人の耳の首飾りのみならず、McCarthy が舞台に設定した19世紀半ばのインディアンとの抗争の中で犠牲となったインディアンの姿をも想起させ、そこからはヴェトナム人にインディアン性を重ねることができるという両者の関係性が見えてくる。

3. 白人女性メアリ・アンのインディアン性

カイオワのインディアン性や有標化が強調される一方で、「ソン・チャボンの恋人」という章に登場する白人女性メアリ・アンにもインディアン的特徴が備わっていると考えられる部分が散見される。17歳のメアリ・アンは、恋人のマーク・フォッシーに会うために戦地ヴェトナムまでやって来る。「長い白い脚と青い眼」をもち「背が高く、骨格のがっしりしたブロンド」(93) の彼女は、「白いキュロットとセクシーなピンクのセーター」(90) という格好で到着するが、次第に戦場での生活に適応し、化粧やアクセサリーをやめ「髪を短くし」(98)、遂にはグリーン・ベレーとともに過激な任務を遂行するようになる。

メアリ・アンが士気を高めるために流す「部族的な音楽」(109, 112) から、彼女のインディアン的属性を発見することができる。この「部族的な音楽」は「奇妙な深い荒野の音」(109) であると言い換えられているが、「荒野」("wilderness") という語は注目に値する。なぜなら「荒野は彼女を引き寄せるように見えた」(105) とあるように、彼女は「土地の一部」(116) と化し、荒野と切っても切り離せない関係となるからである。荒野でのメアリ・アンは野蛮に描かれる。ある日マーク・フォッシーは、メアリ・アンとグリーン・ベレーが一緒に生活する兵舎の「線香とお香の匂い」(109) と「血と焦げた毛と排泄物と腐敗する肉体の甘酸っぱい匂い」(110) が充満する部屋の中をのぞき込む。「大きな黒ヒョウの腐食した頭」が飾られた室内には、積み重ねられた動物と人間の骨があり、そこには「君自身のグークを組み立てよ！！無料見本品！！」(110) と書かれたポスターが貼られている。ピューリタン植民地時代最大の牧師Cotton

Matherは、*Magnalia Christi Americana: Or, the Ecclesiastical History of New-England* (1694-98)の中で、「荒野」という語を繰り返し用いながらインディアンの野蛮な行動を記し、荒野のインディアンをサタンとみなした。ここでのメアリ・アンの様子は「人間らしさが感じられなかった」（110）と説明され、もはや人間として扱われていない。荒野のインディアンを彷彿させる荒野の野蛮なメアリ・アンから、インディアン性の反映を読み取ることは可能ではないだろうか。

アメリカ白人という支配者の立場であるにも関わらず荒野に惹かれるメアリ・アンは、十八世紀に勃発したフレンチ・インディアン戦争を舞台とするJames Fenimore Cooperの*The Last of the Mohicans* (1826)に登場する、白人でありながらインディアンに憧れる混成の人物、ナティ・バンポーことホークアイの姿を彷彿させる。「荒野との戦いとその危険性」（479）に挑むホークアイはモカシンとシカ皮の脚絆を身に着けており、白人には見えない。彼は自身の「血の中にキリスト教文明を持ち合わせていない」ことを認め、「インディアンと疑われるほど長い間インディアンと暮らしてきたから、白人とは言えないかもしれない」（507）と語る。白人だが荒野に魅力を感じインディアン化するメアリ・アンは、まさにホークアイの二十世紀女性版と言えるだろう。荒野での生活にすっかり慣れ親しむメアリ・アンは、周りの白人兵士から「我々自身の小さなネイティヴ」（96）と呼ばれる。白人による「我々自身の小さなネイティヴ」という呼称は、ここでの「ネイティヴ」をインディアンと解釈しうるということを示唆する。

メアリ・アンとは対照的に、インディアンでありながら白人に同化するカイオワであるが、その一方で彼は白人から差異化される。カイオワの死体を探す場面で、白人兵士アザールは「古いカウボーイ映画みたい。インディアン（レッドスキン）がもう一人泥を嚙む」（165）と言う。カイオワは白人に「レッドスキン」と呼ばれ、差別化されるのだ。こういった白人とインディアンとの複雑な関係性を考察する上で、「時々私はこの場所を食べたくなるの」（111）と拡張主義的欲望をのぞかせるメアリ・アンの様子についての語り手の表現は手がかりとなるだろう。

> [Y]ou're become intimate with danger; you're in touch with the far side of yourself, as though it's another hemisphere, and you want to string it out and go wherever the trip takes you and be host to all the possibilities inside yourself. (114)

インディアン性を備える白人メアリ・アンの状態を説明する時に、語り手は「半球」という語を使用する。モンロー・ドクトリンの概念を考慮するならば、半球のレトリックとは「同一性を通しての支配という戦略」であり、インディアンの文脈ではインディアンの同化と掃討が同時に行われるという矛盾を指す[4]。つまりインディアンは、半球のレトリックが孕む、同一を謳いながらも差異化の欲望をもつという矛盾に関与するため、白人アメリカ人とインディアンの関係性は、同化と差異化の間で揺れ、簡単には割り切れない。モンロー・ドクトリンは東半球と西半球を地理的に分割したが、二十世紀に入ると、地理的対立ではなく、自由主義対共産主義というイデオロギー的対立で割り切るトルーマン・ドクトリンが発表される[5]。換言するならば、ヴェトナム戦争時における半球の概念とは、十九世紀までの地理学的図式から成り立つものとは異なり、自由主義に反する北ヴェトナムは攻撃してもよいという解釈へとつながる。だからこそ、ここでの語り手の「もう一つの半球」という表現は示唆的である。モンロー・ドクトリンの半球思考の概念ではなく、トルーマン・ドクトリンが提唱する「もう一つの半球」の概念、すなわち第二次世界大戦後の米ソ冷戦から生じるイデオロギー的図式から成る分割を読み取ることが可能であるからだ。

おわりに

The Things They Carried は、突如言及される移民の開拓者の話 ――「入植者たちの前には、そこにはスー族が住んでいた。そしてスー族が来る前は、そこは広い大平原だった」(138) ―― からもうかがい知ることができるように、インディアンが通奏低音となっており、その存在を絶えず想起させてやまない。インディアン兵士カイオワだけでなく、ヴェトナム人キャラクターや白人メアリ・アンにもインディアン性が付与され、常にインディアンの存在を彷彿させる本作品の試みは、小説の舞台である一九六十年代後半、白人にとっての国内の敵すなわち公民権運動に参加する黒人と、国外の敵すなわちヴェトナム戦争におけるヴェトナム人という二項対立に隠れてしまったインディアンという存在を浮上させる。インディアンをめぐり、Mather、Cooper、Monroe、O'Brien を挙げ、十七世紀から二十世紀にかけて検証してきたが、そこにはインディアンを保護すると言いながら

も抑圧する白人の姿と、支配者の立場でありながらも荒野に惹かれインディアン化する白人の姿があった。*The Things They Carried*のカイオワに見られる、アメリカ白人がインディアンを守るとしながらも抑圧するというメンタリティーは、ヴェトナム戦争に限ったことではなく、十七世紀から既に存在していたのである。アメリカ白人の無意識の中にあるインディアンの保護と抑圧という矛盾において、ヴェトナム戦争はほんの一ページにすぎないのだ。

註

1 *The Things They Carried*と同時期に出版され、アメリカ白人兵と黒人兵の人種的緊張関係を描いている作品として、Dale Dyeの*Platoon* (1986)、Donald Zlotnikの*Eagles Cry Blood* (1986)、William Pelfreyの*Hamburger Hill* (1987)、John Benjamin Carnの*Vietnam Blues: The Story of a Black Soldier* (1988)が挙げられる。

2 Lorrie N. Smithも同様に、*The Things They Carried*における人種の抑圧について論じる。Smithは、Eve Kosofsky Sedgwickが指摘する男同士の絆の強調のため、本書には人種や階級の抑圧が見られると主張する（19）。

3 巽は、開高健の『日本三文オペラ』（1959）、小松左京の『日本アパッチ族』（1964）、『夜を賭けて』（1994）を取り上げ、日本人や韓国人といったアジア人とインディアン、アパッチ族との間に見られるアナロジーを分析する（155-164）。

4 Murphy, Gretchen. *Hemispheric Imaginings: The Monroe Doctrine and Narratives of U.S. Empire* (Durham: Duke UP, 2005) 5-6.

5 巽孝之。「モンローは誘惑する ── アメリカ最後の一線」（東京：彩流社、2016）276-77。

引用文献

Cajete, Gregory. “Philosophy of Native Science.” *American Indian Thought: Philosophical Essays*. Ed. Anne Waters. Malden, MA: Blackwell, 2004. 45-57. Print.

Christopher, Renny. *The Viet Nam War: The American War*. Amherst: U of Massachusetts P, 1995. Print.

Clarke, Michael Tavel. “‘I Feel Close to Myself’: Solipsism and US Imperialism in Tim O’Brien’s *The Things They Carried*.” *College Literature* 40.2 (Spring 2013): 130-54. Web. *Project Muse*. 14 July. 2016.

Cooper, James Fenimore. *The Leatherstocking Tales Volume 1: The Last of the Mohicans; A*

Narrative of 1757. 1826. New York: Literary Classics of the U.S., 1985. Print.

Dunnaway, Jen. "'One More Redskin Bites the Dirt': Racial Melancholy in Vietnam War Representation." *Arizona Quarterly* 64.1 (2008): 109-29. Web. *Literature Online*. 19 July. 2016.

Fiedler, Leslie A. *The Return of the Vanishing American*. New York: Stein and Day, 1968. Print.

Herzog, Tobey C. *Tim O'Brien*. New York: Twayne, 1997. Print.

Kinney, Katherine. *Friendly Fire: American Images of the Vietnam War*. Oxford: Oxford UP, 2000. Print.

Mather, Cotton. *Magnalia Christi Americana: Or, the Ecclesiastical History of New-England*. 1694-98. London: Thomas, Parkhurst, 1702. Web. *Eighteen Century Collections Online*. 31 Jan. 2017.

McCarthy, Cormac. *Blood Meridian, or the Evening Redness in the West*. 1985. New York: Modern Library, 2001. Print.

Mieder, Wolfgang. "The Only Good Indian Is a Dead Indian: History and Meaning of a Proverbial Stereotype." *The Journal of American Folklore* 106.419 (Winter 1993): 38-60. Web. JSTOR. 6 Feb. 2017.

Murphy, Gretchen. *Hemispheric Imaginings: The Monroe Doctrine and Narratives of U.S. Empire*. Durham: Duke UP, 2005. Print.

O'Brien, Tim. *The Things They Carried*. 1990. New York: Broadway, 1998. Print.

Takayuki, Tatsumi. *Full Metal Apache: Transactions between Cyberpunk Japan and Avant-Pop America*. Durham: Duke UP, 2006. Print.

Teuton, Sean Kicummah. *Red Land, Red Power: Grounding Knowledge in the American Indian Novel*. Durham: Duke UP, 2008. Print.

巽孝之「モンローは誘惑する ── アメリカ最後の一線」下河辺美知子編『モンロー・ドクトリンの半球分割 ── トランスナショナル時代の地政学』東京：彩流社、2016 年。

白井洋子『ベトナム戦争のアメリカ ── もう一つのアメリカ史』東京：刀水書房、2006 年。